

## [成果情報名]モモ果実赤点病の効果的な防除体系

[要約]モモ果実赤点病菌の果実への主要な感染時期は6月上旬～7月上旬であり、この時期にマンゼブ水和剤、ベノミル・TPN水和剤、ピラクロストロビン・ボスカリド水和剤、イミノクタジリアルベシル酸塩水和剤、ペンチオピラド水和剤を使用する体系により、本病を効果的に防除することができる。

[キーワード]モモ、モモ果実赤点病、防除体系

[担当]福島県農業総合センター果樹研究所・病害虫科

[代表連絡先]電話 024-542-4199

[区分]東北農業・果樹

[分類]普及成果情報

## [背景・ねらい]

モモ果実赤点病は、着色期頃に果実表面に赤色の小斑点が生じて商品価値を損なう病害で、全国のモモ産地で発生が確認されている。病原は糸状菌の一種である *Ellisembia* sp. であり、主な伝染源は枝上に形成された分生子である。分生子は6月上旬～9月上旬に飛散し、6～7月の降雨後に飛散量が多くなる傾向にある。福島県内では1998年頃から県北地方の山間部を中心に発生がみられており、常発園地では対策に苦慮している状況にある。

そこで、モモ果実赤点病の感染時期を明らかにするとともに、防除効果の高い薬剤を選択して防除体系を策定する。

## [成果の内容・特徴]

1. 果実感染は5月下旬～7月上旬まで成立し、なかでも梅雨期の感染量が多かった（表1）。
2. 登録薬剤の中では、マンゼブ水和剤とベノミル・TPN水和剤の防除効果が安定して高く、ピラクロストロビン・ボスカリド水和剤の効果の高さも認められた（図1）。
3. これらの成果に基づいて慣行防除体系を見直し、モモ果実赤点病常発地帯を対象とした防除強化大系を策定した（表2）。策定に当たっては、過去の知見等を踏まえ、主要病害である黒星病、灰星病、ホモプシス腐敗病の同時防除が可能となるよう考慮した。

## [普及のための参考情報]

1. 普及対象：モモ果実赤点病の発生が確認されているモモ産地の生産者、指導機関関係者。
2. 普及予定地域・普及予定面積・普及台数等：モモ果実赤点病の発生が確認されている福島市、伊達市および伊達郡のモモ栽培地域約1,600ha（福島県園芸課調べ）。
3. その他：本防除体系は、平成30年版福島県農作物病害虫防除指針（福島県農林水産部発行）に反映した。

[具体的データ]

表1 時期別の接種によるモモ果実赤点病の果実発病調査 (2012年)

接種日	発病果率 (%)
5月30日	18.2
6月11日	100
6月20日	83.3
7月4日	96.3
7月14日	28.0

※接種日毎に25~42果を供試  
 ※5月30日は菌糸を接種

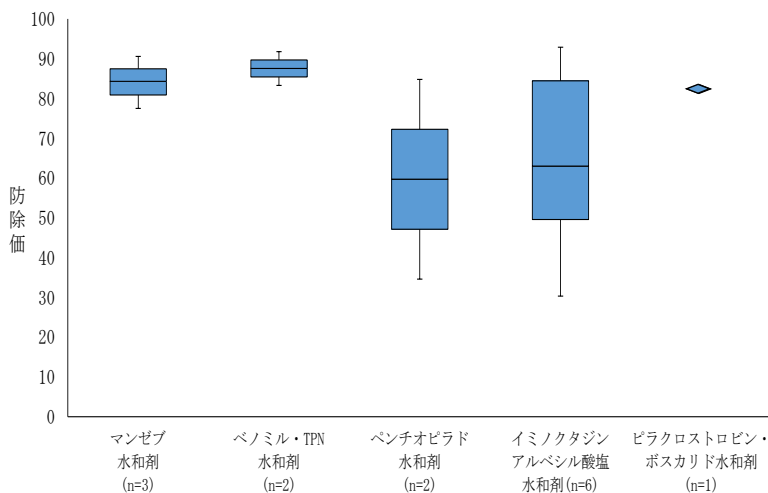


図1 モモ果実赤点病に対する各種薬剤の防除効果 (2009~2017年)

表2 モモ果実赤点病の防除体系

防除時期	モモ果実赤点病防除強化体系			慣行防除体系		
	使用薬剤	希釈倍数	主な対象病害 <sup>a)</sup>	使用薬剤	希釈倍数	主な対象病害 <sup>a)</sup>
6月10日頃	マンゼブ水和剤	600倍	果実赤点病、黒星病	チウラム水和剤	500倍	黒星病
6月20日頃	ベノミル・TPN水和剤	1000倍	果実赤点病、黒星病、灰星病	ジチアノン水和剤	600倍	黒星病、灰星病
6月30日頃	ピラクロストロビン・ボスカリド水和剤	2000倍	果実赤点病、灰星病、ホモブシス腐敗病	イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤	1000倍	果実赤点病、灰星病、ホモブシス腐敗病
7月10日頃	ベノミル・TPN水和剤	1000倍	果実赤点病、灰星病、ホモブシス腐敗病	ベノミル・TPN水和剤 またはジチアノン水和剤	1000倍 600倍	(果実赤点病) <sup>b)</sup> 、灰星病、ホモブシス腐敗病
7月20日頃	イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤	1000倍	果実赤点病、灰星病、ホモブシス腐敗病	ベノミル・TPN水和剤 またはイミノクタジンアルベシル酸塩水和剤	1000倍 1000倍	果実赤点病、灰星病、ホモブシス腐敗病
7月30日頃	ベンチオピラド水和剤	2000倍	果実赤点病、灰星病	灰星病防除剤		灰星病

a) モモせん孔細菌病を除く。

b) ベノミル・TPN水和剤のみモモ果実赤点病に登録あり。

(七海隆之)

[その他]

研究担当者：菅野英二、佐野真知子、七海隆之、藤田剛輝、藤田尚子、柳沼久美子  
 発表論文等：

- 1) 菅野ら (2008) 日本植物病理学会報、74(3):184
- 2) 福島県実用化技術情報 (2010)
- 3) 三瓶ら (2012) 北日本病害虫研究会報、63:251
- 4) 福島県実用化技術情報 (2017)